



おはようございます。柴田です。2年2組は柴田・谷口・川崎の3人で担任副担任をさせてもらっていますが、今朝を迎えた時点で学級通信は363号を迎えていました。先生個人でも2学期だけで150近くの通信を書いているので、正直何を書いたかも覚えていません。ですので、もしかすると2年2組の子たちは「一度読んだことがある!!」となるかもしれませんが、悪しからずご了承ください。とりあえず今パッと思いついたことを文字にしてみます。

さて、今日は誰もが一度は使ったことがあるであろう「あの子は才能がある」という言葉について考えてみたいと思います。

【才能の正体】

「才能」を辞書で引いてみると、「生まれつきの能力。また、その働きのすぐれていること。才幹」（日本語大辞典より）、「物事をうまくなしとげるすぐれた能力。技術・学問・芸能などについての素質や能力」（大辞円より）と書かれています。

多くの人は**才能とは「もって生まれた、すぐれた能力」**と解釈しているのではないのでしょうか？

ところでみんなは「ビリギャル」という映画を見たり、本を読んだことはあるだろうか？成績最底辺のギャル・さやかがカリスマ塾講師との出会いをきっかけに勉強へ本気で向き合い、慶應義塾大学に合格するまでの実話ストーリーです。

図書室に本も置いてあるのでぜひ読んでみてください。映画も面白いですよ。

この映画や本の中で出てくるカリスマ塾講師が坪田信貴先生という方です。その坪田先生は「才能の正体」という本の中で次のように述べています。

才能とは、「みんなが持っている能力を磨いて尖（とが）った部分」だと、僕は思います。

基本的には、後天的なものです。

能力は誰でも持っているもの。

歩くのも能力だし、話をするのも能力。動詞のすべてが能力です。

その能力を磨いていって、どんどん高まって、人よりも突出したり、尖ったりする部分が出てきたら、それが才能になるのです。

ちなみに、広辞苑で「才能」を引いてみると、「才知と能力。ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力」と書かれています。

『才能の正体』著：坪田信貴

このまま2枚目に続きます。



上の文章を読んでみんなは何を感じたでしょうか？

「とはいえ、自分は才能がないから…」と思う人もいるでしょう。

その人は、残念ながらその後も大きく人生が変わることはないかもしれません。大切なことは「何を信じるか」です。

【心の持ちよう】

先ほども書いたように「才能とは磨いて尖ったもの」なので、尖らせていくためには努力することが必要です。何もせずして、自分の能力が磨かれていうことはありません。ランニングをしなければタイムが伸びないように、何事にも努力の積み重ねが必要です。

そして、その努力をやり抜くことが必要になってきます。

その「やり抜く力」についても研究がなされており、ハーバード大学のドウエック教授は「やり抜く力を伸ばすためには心の持ちようが大切である」と述べています。

ドウエック教授らの研究によると、「自分のもともとの能力は生まれつきのものではなくて、努力によって後天的に伸ばすことができる」ということを信じる子どもは「やり抜く力」が強いことがわかっています。

逆に、「やり抜く力」を弱める「心の持ちよう」もあります。それは「ステレオタイプの脅威」といわれるものです。

とある研究では、「年齢とともに記憶力は低下する」という記事を読んだ人と読まなかった人だと、記事を読んだ人のほうが実際に記憶している単語量が少なかったことが示されています。

何を信じるかによって、その人の能力に影響を及ぼしていることがこの研究からわかるのではないのでしょうか？

今日の本題に戻ると、才能についてもそうです。

「才能は生まれつきのものだ」と思うか、「才能は後天的に伸ばすことができる」と思うかどうかで、自身の行動は変わってきます。

才能は生まれつきのものだと考える人はその後の努力を怠り、才能は後天的に伸ばすことができると考える人はコツコツと努力を積み重ねることをするでしょう。

周りと比較して、自分のできていない部分ばかりを見てしまうと、このような現象が起きてしまうのかもしれません。

でも成長において大切なことは、周りとの比較ではなく、自分自身の成長です。「成長を実感すること」が“自信につながります”。

自分の人生は、努力次第で何とかなると信じて、日々の努力を積み重ねていきましょう。先生もまだまだ成長したいので日々積み重ねていきたいと思います。

一緒に頑張ろう。